

## 第3学年B組 社会科授業案

場所 3B教室  
授業者 志賀 充規

### 1 単元 未来をつくる新たな国のかたち（現代社会を見つめる）

#### 2 単元の構想

##### （1）本単元で目ざす子どもの姿

東京一極集中により地方の衰退が進む事実を知った子どもは、地方創生について追究する。さまざまな地方創生の取り組みがなされる中、政府は交付金を出した後は地方任せにするため、政府の支援に疑問を感じ、地方創生と政府の支援とのつながりについて取材する。そして、持続可能な地方のあり方を明らかにし、これから日本を支える一員として、未来における自分の姿を考え続けていく

##### （2）本単元で伸ばしたい力

前単元「世界に羽ばたくMRJ」では、国産旅客機MRJの現状を正確に捉え、国産旅客機を生産する意義について追究した。そして、国産旅客機の開発や経緯に関わる複数の情報を吟味する中で、解決すべき問題を見いだす力を育むことができた。また、取材をとおした個々の追究まとめを読んで、事前に互いの思いや考えにふれることで、意見の関わりを想定する力を育んだ。

本単元では、地方創生をもとに、持続可能な地方のあり方について追究する。地方創生についてさまざまな情報を吟味する中で、自分たちが解決すべき問題を見いだす力を育む。そして、地方創生のよりよいあり方について官公庁、政治家や企業への取材をとおして迫っていく中で、集めた情報のもつ意味を捉える力を育む。更に、取材をもとに地方創生の取り組みや道州制の利点や欠点について考察することで、事実を正確に捉え、公正に判断する力を育む。地方創生のよりよいあり方についての意見交流では、事前に追究まとめを読み合い、互いの思いや考えを把握できるようにすることで、意見交流で仲間とのように関わるかという意見の関わりを想定する力を育んでいく。

##### （3）はたらきかけと「学んだこと」を行動につなげる子どもの姿

見つめる段階では、地方の衰退について考える。東京一極集中の実態を捉えられるように、東京の人口増加が地方からの転入によることを表すグラフを提示する。更に、地方創生に取り組んでいる島根県邑南町の商品を提示する。地方創生に動き出した自治体があることを知った子どもは、地方創生が東京一極集中をなくし、人口減少に歯止めをかけるのではないかと考え、日本全国における地方創生の取り組みについて追究を始める。

向き合う段階では、地方創生の取り組みについて追究していく。具体的な事実を明らかにしたところで意見交流を行う。そこでは、日本全国で行われている地方創生の取り組みについての肯定的な考えが出される。そこで、計画書を出し、支援を希望している自治体に政府は交付金や補助金を出すが、その後の支援が投げやりだという考え方を取り上げることで、問題を焦点化する。そして、地方創生に携わる人々の営みや願いから、政府の支援の方法がよりよい地方創生につながるのかを明らかにしたいと考え、官公庁、自治体、企業などに取材をし始める。

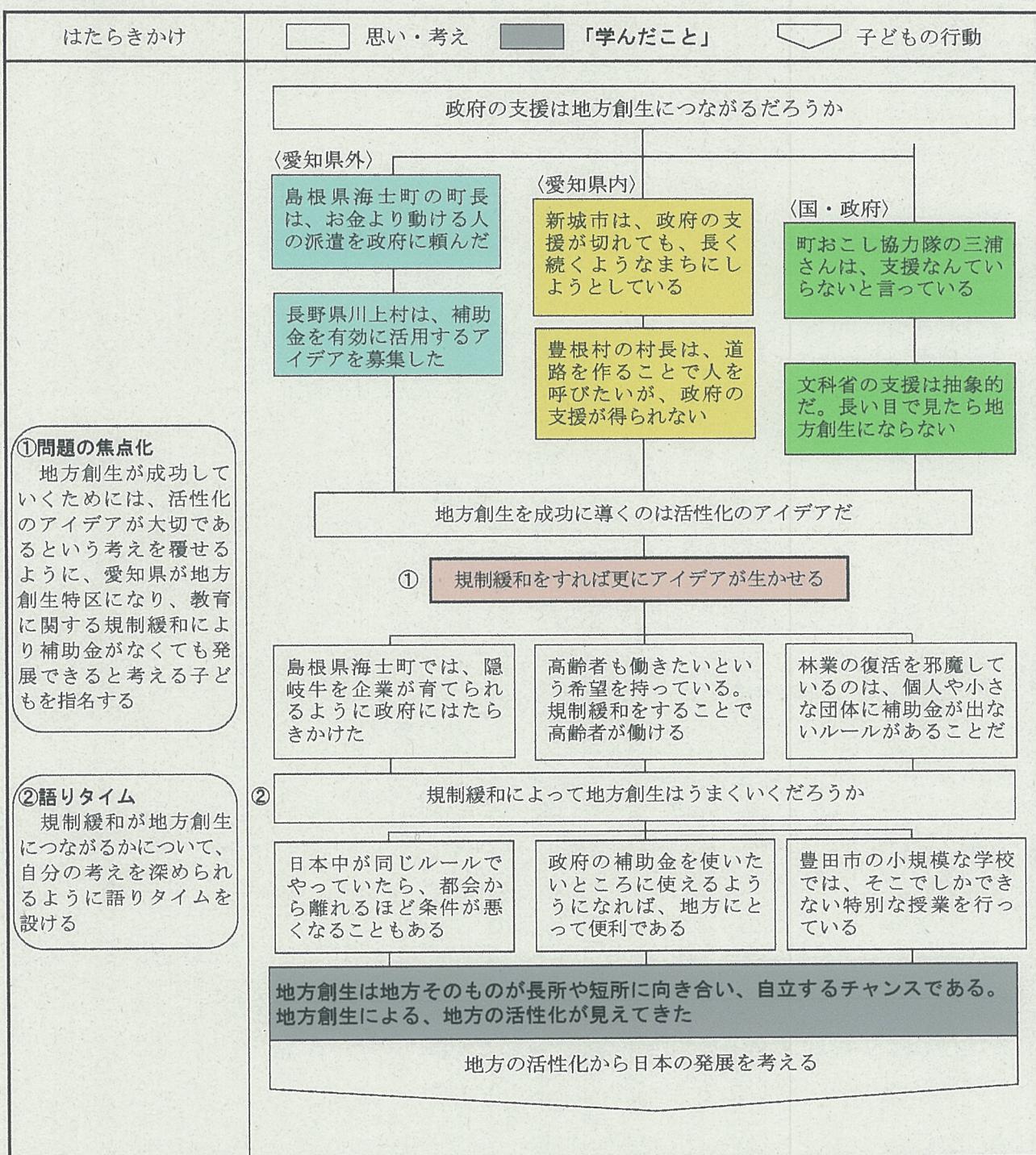
迫る段階では、政府の支援が地方創生につながるのかについて意見交流をする。その中で、島根県海士町や愛知県新城市の取り組みが出される。そこでは、経済的な支援以上に、活性化のアイデアが得られる人的支援を求めていることを実感する。そこで、愛知県が教育による地方創生特区に選ばれたことで、規制緩和が可能になり、政府の支援がなくても発展ができるという考え方を取り上げる。そして、規制緩和をもとにした地方創生に対する考え方を意見交流の中で関わらせることで、地方そのものがまちの長所や短所を見つめ直し、国に頼らず自立していくことが地方の活性化につながっていくことを捉え始める。

つなげる段階では、地方創生により地方が活性化した新しい社会の姿を捉えた子どもに、新たな国のかたちを成し遂げた日本の姿から見える自分のあり方を考える時間を設ける。これまでの追究や取材、意見交流をもとに、地方創生によつてもたらされる新しい日本の姿を捉えた子どもは、自分が担うことになるこれから社会の中で、自分にできることや社会とのつながりを考え続けていく。

#### 4 本時の構想 (12/15)

地方創生のための政府の支援が、計画書を出した自治体に交付金などを与え、その後の援助が継続的に行われていないことを捉えた子どもは、政府の支援は地方創生につながるのかを明らかにするために、支援をする側である政府の機関や支援を受ける側である自治体、企業などに取材をした。

本時では、まず、島根県海士町や愛知県内の自治体、地域おこし協力隊に取材したことなどが出される。そこでは、多くの自治体で経済的な支援よりも具体的な活性化のアイデアを考えられる人的支援を望んでいることが明らかにされる。また、地域おこし協力隊の取材では政府の支援があることで、活動目的が限定されるといった意見が出される。さらに、文部科学省の活動は継続性がないなどの意見が出される。その中で、愛知県が教育による地方創生特区に選ばれたことで、規制緩和が可能になり、政府からの支援を考えなくても発展できると考えた子どもの意見を取り上げる。そして、地方創生を成功に導くのは、活性化のアイデアであるという考えを覆し、問題を焦点化する。子どもは規制緩和をすれば、地方の長所を更に伸ばせるのではないかと考え、地方そのものが長所や短所を見つめ直し、国に頼らず自立していくことが地方の活性化につながることを捉え、日本の発展を考え始める。



## 5 単元構想表（15時間完了）

段階	主なはたらきかけ	思い・考え	「学んだこと」	子どもの行動	社会科で重視する力
見つめる	<p>○知的好奇心の喚起 東京一極集中と、地方が人口減に歯止めをかける取り組みをしていることが捉えられるように、東京の人口や産業の集中に関する新聞記事やグラフ、地方の名産品を提示する</p>	日本の人口はこれから減少し、高齢化が進む	修学旅行で見た東京は、自分の住む町よりも栄えている		<p>★情報つなぎ合わせ、問題を見いだす力 ・東京に人口や産業が集まり、地方の衰退につながることについてさまざまな情報を吟味する中で、自分たちが解決すべき問題を見いだす</p>
向き合う	<p>○掲示による 関わり 地方創生に関する仲間の追究内容を把握できるように、追究内容を掲示する</p>	東京の人口が増えているのは、地方から来る人が多いからだ	東京は交通も便利で、仕事も多い。将来は東京で働きたい	東京に大きな災害が起きたら、日本への影響が大きい	<p>★情報のもつ意味を捉える力 ・地方創生の資料や情報収集をとおして得た事実や知識から、仲間の考え方と自分の考え方の相違点や類似点を把握する</p>
迫る	<p>○問題の焦点化 政府が自治体の取り組みを支援し、成功に導くといふことを政府の支援が投げやりではないかと考えている子どもの意見を取り上げ、問題を焦点化する</p>	東京は人口が増え続けている。反面、地方は働き手が減り、地方の衰退が進んでいく。地方ではどのような取り組みをしているのか	地方創生の取り組み調べる 3～6時		<p>★事実を正確に捉え公正に判断する力 ・地方創生による地域の活性化について、役所や専門家に取材して得た情報を多面的・多角的に考察し、集めた情報の真意を見極めて事象を正確に捉える</p>
つなげる	<p>○取材による 人との出会い 地方創生に関する人々や願いに迫るよう官公庁、自治体、企業への取材を推奨する</p>	徳島県神山町では、ネット環境を整え企業誘致した	地方創生の総合戦略は、人と仕事を結びつけてよい	東栄町は、若者向けの住宅を整備している	
		岩手県西和賀町は、地方創生先行型予算を初めて活用した	地域おこし協力隊が活動しているが、生かされていない	豊根村は、世代に適した支援を徹底的に行っている	
		官公庁、自治体、企業などに取材する 7～12時（本時12）			
		島根県海士町では、お金より人の支援を望んでいる	新城市は補助金が切れても、長く続くまちづくりをしている	町おこし協力隊は政府の支援をいらないと言っている	
		長野県川上村は、補助金の使い道を住民に聞いた	政府の補助金を、地方政府が自由に使えることが大切である	文科省の支援は、抽象的で持続性がないのでよくない	
		地方創生は地方そのものが長所や短所に向き合い、自立するチャンスである。地方創生による、地方の活性化が見えてきた	地方の活性化から日本の発展を考える 13～15時		
		ベンチャー企業には、地方のために動き出しているものもある	地方に住みたい若者が増えるように政府が取り組むとよい	地方でやれることを増やし、地方に適した政策を行う	
		日本が長く発展し続けていくためには、地方も活発でなければならない。さらによりよい国になるよう自分ができることを考えたい	未来の日本を支える一員として、未来における自分の姿を思い描く		
		この先の日本の姿を、社会のさまざまな側面から考え続ける	理想的な日本社会を未来へつなぐため、自分にできることを考える		